東遊記 五

ル 3
323
5

加名3
號 323
巻 5

伊勢文

東遊記巻之五

秋田路

さて秋田枝ゝ云字年ゝ秋田の
ゝ我秋田枝ゝハ二月
の末ゝ出ゝ只大根のふと
ゝ食ゝ
ゝ仕甚多く出ハ
ゝ人ハ竹
ゝ中ゝ実ゝ
ゝ又ハ糟漬抔ゝハ

なくまゝにくさるもの賞翫なり　故に京都大坂邪
へハ送り出すもの　稀なり　彼地にて竹に六七月の比
蟹に生るもの　玄大なるハ　秋田城下より十里半蘭
ゝく長木が沢といふ所あり　半澤に生ずる所
長二尺八寸ひろさ　幅四寸　厚さ四寸　幅なるハ　秋田
枝といふ所のものハ　此所にあり　実に京国にハ
三月迄ハ一切のもの　不出　蕨の如き　我
八ゝ　本草　詩経　也　秋田に限る　仙
基　南部　津軽　松前の蕨皆大きく　能中　蝦夷地

に入りて馬にて行　蕨の如く鋒のごと
く頭に霞ハかゝる　如きもの　人参人間う
のものの多しとも　秋田津軽迄極く北地也　杉ゝく
竹なく　生かれ　草及ものも　多きもの多し　七
中まのごとくものゝ　只虎杖　高頭車　前州　備後
仙臺萩　多　長多く　且肥大　ものゝ　目拔　多
生ず　彼地にて　根曲り竹と云　蝦夷地にハ　ヤコ
タンと云　蝦夷にあるハ　太小　ゝく　海ゝく　長八尺　人間

とても杖を突くまゝにし奥州の内にて黒き紙を
すける所には今も蝦夷地にきたるよし
象て此は純黒なる紙の皮は至て珍重する事なる
予我見たりしにあまりの不手なる事黒くこそ
なきのえし

朱谷

奥州津軽の外が浜に平舘といふ所あり其所の北
にあたる巌石海に突出たる所あり其石の色紅のごとし
いふ先我越えて行けば朱谷ある山にある峰

てる所より細き谷川流れ出て海に落る所
谷の土石皆朱色なり紅の色までいと赤く
ぬれたる石の銘目に映ずるいろ誠に花やか
なる目を驚かす此地は落る水の海の小石ま
でも多く朱色なり此辺の海中の魚皆赤
なる谷にある水の朱の気によりて海中の魚
或は石までも朱色なるよし無情有情ともに
是は國どころ中めずらしき余もあまり珍らしさ
小谷川に添ひ奥深く入りて見るに朱添多し

土と協りて人るに生色あざやかなる大なる
朱石ばかり解きかゝ袖すり呼る其石乾る時に朱
色かゝるまこありて弁柄のごとくなる谷の入
口に小柵ありて人往入る事を禁じたる人あり
て領主の益しせもし事なりしが和の産
の餞饉より分て渡らけくましく仕あらい人種
の尽るもいふ程のすくなく守るべき人も外
もしが又盗る人もまれ糸を抜ひしい僅よ三
の渡ばかりしが柵もとてたる人多く通路自

由なりしき時帝よりあるしもいふべし極て小
の朱砂辰砂よりも多いぶ人多き所あらい
いうどうの益なりんうし

化石渓

越前國大野領分の山中お波村といふ所に伝
ふる石化たる谷あり家破地よ拾ひんとせし
うどもれ形色極月なるしこが通路雪よ閉られて
ふ事あるいはざる記其辺の人よりしく見聞よ大
野の城下より出道九里ありて細き谷川あるを

水の流れたる跡器物何にても年月或は一月経入金
時を皆石と成る筆紙下駄草履腦梳の類
も皆石となるこれ余京都にて先年木の枝を
雪の積りたるを生雪にも石となる成るべし
又生紙を束ねて少くはなれるを
小竹にて石となるべし竹谷にて
竹にて石となるものなれば生竹をひしゃ極法の地にて水
中より氣の出る久茂漬にて石に化する山やう
一しゃ九ふいあれば夏日にても同茂石となるこれを

見ハいかゝ成ること成ること廣委敷筆にて谷川
の石となる涙のこと成れば流れ来りて潮と成る
小粘土しゝ石と成るべし結ぶ甚谷の奥に
玉液あり流れ物に付て石となる山やと
ごりる雲夷法の事と書成べし事乃
ゑりしゃを中ふも皇國の内に諸物の石と化を
る地あることと載たる谷も甚類少へ

浮嶋

生羽國山敷より奥に大沼山と云ふ所あり甚山に成

大行院に入て修験道をこゝに諸の数寄人
雅名を
為る宮とゝふ仏山の縁起と申けハ人皇四十代の
ど天武天皇の御白鳳年号役行者の開基にて蒼
稲魂神勅請の地なり山のこゝ〳〵に大池あり
大沼とゝ名付く是を池の般大の宮ゝ異似ゝを
のゝて名付しとゝや仏池ハ竜神の変化あり世間
未曾有の奇事なりとゝも叫る僻をの地なり故
為る人も稀くゝを知る者すくなしいうなるゝの
ぞとゝふ池の中ゝ六十六の鴻あゝて生る時ハ

水面と拾ひを時の数六十六ようふる日本風雅の形相
いふ甚青紙碁菩薩も代流よりもつて実方中将も代流時
と云物し時ひしひしと和実方拾ひひしひし時
江の海波静なる夕べしまやの夕べ浦に漕ぎ
緑ふかひしひしといひ代ふ流のかりうる古松二株あり一株
を実方中将の時又松と云ふ実方代松と俗うて時代
又ひしひしと生時代神感あらく流れを生てて
松の根まで拾ぎきして一株の松流と松といふ浮時
先を流の岸より生て清の中ふまで西生まて異大ふ

るを奥州時と名付く生稚の時くも生おい気あ、しら
ど今ハまぎれて行ふふと云ふ唯一不
流の中へ突出る岸根と芦原時といふ代鳴ならん動ら
ど青より回しふまあり又流の命ふのあ社右の方より
つて流こくる色黒きし木の株のごきのあり見ど浮
水と名付て天下の吉凶式占ふしぶ流る時は天下
太平の象なり流こて又えれい必変と示ふ流こ堤面
う拾びしも土月上旬のうなりふ俳諧の文り尊ふ
ハ大切流のまそふしと拾て一日流迄ふ知く又こに

名面壁すいも青く水際ふかい芦萱生ひ茂りて
さて山深く人跡絶たる土地なるにて水清く森と
世外の思いと親せり此辺の山ばかり此辺山と云
氣強き色バ藤山吹躑躅なども折ふの頃こそ
多の勝まさるのどやかのうらに伝なくさとをやはらぐの深
生るうらし目もまるさて孤舟ばかり水面こそ只三四人
斗と七八人斗の小船言のとを有りてさそを動くるも
なく船よ船くこの船と有るやうまた又日暮くまして
早う在りしどもうるといふべきるもなし子日新も西山

小頃きいるの樹よ右し雪いるる岸よ船をいとあ
すぐくまうゆく道よ京しいハ大仏殿よ船ぬる信
往来く通行びとねこのひしまやと問ふいやをそ
も言うしとふまぞうる信日よりて折びあるぬ
こもるるる往道ふく又の日ゆ毎ことふ
信面いと晴くく時行浮折ぶとつふいるるごふる
でし世ふ云伝ふるこさてもきるまとも語ふ
よいしたくく人と逢りしもるる世に多記者ひこ
仏池の不思議も甚ちぶひるるでしといかぬなく

て生涯ハ殊ら甚堅日記出くるに天気はり
かごのうゑくきぐふゆもべき仏地もせざるハ知ぞく
ゆう是のごとくけるゆゑ成懐すしりふハ後日波り
帰ぞてぜひ生ふ生後とも又せうと例乃二丈
の松のなに箕居しく波の面ゑ波しるにきの
ふゑらし二つの小浮又えびこハ時しさる山でも動け
いこをと竜牧毋しく出るまくの象白ちどロぞさ
こ居る経ようさの岩根ゆし動くやふ又面る
ようぞさばこそと目もくあさば係居るに一つの浮と

ワうをて浮と出つ群こ波の中ようあを沈くさ陸
いく目さ面しく又ちびこうみうく白ふの岩根ちあし仏
てふゑくくよ浮ちるかくくちくよう浮と出る仏こ波
の中ユ教くの浮出来て拝り波朱すをを陸あみうく
浮波貴ひ出るびびく目ちを仏動きて拝くさいこんう
ふふく中ま彼奥州浮ちをくりやちくん二三丈餘あも
及びくいと大ちく甚偶のこちを小松生ひ高ち義の面峡
うアをはくじユ色と爭ひふびう浮ち出く拝ちるさ
陸系思議とりふもあるうあり面白く波ちちくてちちう古

なる不思議也此岸に針をもおろせば右に寄り左に纏き
全然まよふ故に又針を出しある時先きの端に針ある
其の右かしらは棋に押すべきに先にきく先きの端にた
めつて信によりけて行づき時は是をおし推にあ
るさ毎なり縁日に結するみもいふもる出来てはすと見ば
其を見れき不しの縁は大いに院にあるにも信も浮端と
見てるつよと繋して浮嶌の春のかざをとしの平經
日ハいよく当してさ出るる江戸の諸人は多人湯殿山
山しく成るきは浮嶌を見物せんとて参詣するに達き

のふのとと御よい是非々て来り繁侍ひすべしといふうそ
いまさ何事もなくされハ文同んして参ひ彼地近く
おりえるれきのふえし纔くの時もなくなる絶よ二所
むかりなし浮々揺くすこしも動く気色なく夢なへ至
信じてやうくをなむ叔行すべしとえとハひく佑成れ
どさら不動くべきらもなうれバ諸人大きに退屈し
いそほつもあるみ所々に起居つくハ所る好道のつまり遊
来れ山べしとてむなしく去るハいと無念に事まさる
なりき

大骨

余ら奥州より帰りし頃南部の内京古と迫の海渡る
ある大骨の望日人の足だるき如くなる骨肉はたゞ皮のみ
ありて指もいまだ分ちがたく骨髄も
なり指ちり魚歯とみえたるふ人の足にあらざるいわれ
ぞうく大なるものゝ如くにして人類なる証拠
なきものゝ如しとはいちりて余是を世に考ふるに南部
国村の大骨といひそかも村里の民俗なども
是を以仏体指なる大なる骨なるあり又古塚など

に掘出せしこと奥州迫にハ
多く骨髄出小出迫にハ
奥州にハかゝる骨城郭乃所又ハ田舎の又ハ市
郭など甚多仏法の器物の骨なりといひなせどは
くさひとつにて入りくさせるとあるじむりの人と
なるべくに人ようりてなるべきハ名ある人ともなれど
大方ものゝ如くなるべきなれ方ものと考へる
日本の東の方数万里のふる巴大湖といふ所あり
いふ大人ふるくより国の人ハ長ち数丈ありしと年阿蒙

陀人諸国とえぞうしつゝぐ彼島にあるあとをもんが
為に使をあゞうえるに沙汰に関係あるを以教えは
て人間のごとくにあらざるしるべ珍奇なる近国まるとの
あるもあり又三国に漂流せし人はひとあるいしこゝに
もあるえたいの日なめの者にあるて大人国あるく裏
島の人いなのけ二家にも及びるこゝ所の奥州
遠きこゝろ大胃をあげく西国に国まるなるに必定
彼巴大湾の人漁人などの舟の覆つて海中に死せ
し骨の首も大風に日本の東海遠に吹寄せと

ゆるしてくあやしみ思ひまく作るも塚まる綱めしと
ゆるの今度の南北領の大なる足も彼島の人は漂流せ
う大波浪小足のをあ切〳〵まて大風に日本の海まく
流れ来りしなるべし小方まに小人国あるく身の長サ
三尺ばかりまるふさもたびあるに方に大人国にもゆべし
只格別に大きて人情も世界にあ遠せるゆをいまこ
ゆるの通言をけば〳〵ゆるゆるあるまるかるべし
もとき年八隅に小東陀国とあり西りく諸国夫
の島〳〵通行ゆけばはひ小人国もあるべきや

金華山

奥州金花山は日本より黄金の出初し山とぞ
こゝを東嶽とし[illegible]ふたりて北又日本東方の限り
なりて景色奇絶の地実に仙境ともいへべし 仙臺より
東方小海迴船の入る大湊なり五の港ゝ頃る
繁華の地なり石巻の渡波とゆふあり波と伝ひ
山に登り大なる岬を鄂えり経十餘里にして山るゝ
ふもとに至る小家あり金花山ゆふ[illegible]
見金花山の海[illegible]

さしてそ宮殿とく船と出しく漕るしく是渡て俗小
三十町斗うそ命ふの山ふ小ふるやふよ又ゆもとども迫門のよ
山ふよ浪こふふく大よ荒きあり此三十丁斗ふるの中程
よ和ふ山ふしき大浪ある時天氣の時といへども必此大
浪いあるこく此波と彼此の方ふ御飯しいふ天氣
穏なる日八此大波と一つ知ぐくもあり又ふ風波あ
る日八大波とはつもおつも越ゆるこく此不乃船いあく此浪と
こゆるくと是ふ有るゆふ浪あるとバ是沿よう浪引時
八是浪よはよく自由ふ船を操るゆもとども他邦の人も

いつかる丈丈なる公の者ふも此ふ恐ふ怪ふ
八寺院一宇あく作ふ天狗屋の山ふ絶頂ふ
八丁といふ所ふ高ふ立平ふ三十畳の初ふ三十畳といふ
岩ふよ怪魔の社あり箱伸ふ天女出現の昊窟もあ
り是ふ命ふ紙ゆる所ふ水晶石といふふ大ふ丈十丈
廻りも数十丈ふ高く全体六角の白石ふ明徹ふ
ゆるふふ所ふ多ふ品ふ石ふ一十
の松自然ふ生ふ枝ふ花ふ
ぶり人化ふ造ふ

山ハ山布哈美金ふりといひ伝ふ其に小くふくも海砂皆金
色ゝ光り波に映しくいつくもの山も岩石も金砂
吹出く通語に乃も皆金色ゝ石砂流の美金と称
くゝ海せのふとりいく熊人ゝ来ゝと泊く拾ふ又
海辺に船ゝ舟ゝ山布ゝ来ゝきゝ
草鞋と紙捨く船ゝ舟ゝ草鞋ゝ生る砂
金我陸地に流れ来ゝき砂流の流れの
ゝ海苔 和布 辰角菜の類ゝ生し海辺の民
見どころく産業ゝ又海鼠と生し海ゝ

海鼠ハ金砂と称ゝ金海鼠と称ゝ
時ゝ海ゝ乃ハ邦ゝ人ゝ
ゝ海鼠ハ海辺の
服化邦の産ゝ小く性粉なり代時ハ詳ゝ日ゝ
正ゝ海ゝ海布ゝ海布ゝ
ふゝ面船津港の地方ハ奥沢の奥ゝ
ゝ数百里ゝ東ゝ山ゝ
ゝ入ゝ代迄ハ時ゝ海ゝ
ゝ地ゝ東ハ猟ゝ

二千里ばかりのハ海あるゝなきさ不ゝるゝ波の大
ゝるも玄のゝくすゝく海中の極不ゝるゝいお風に
たる大海ゝいあゝ波唯山と山との幅狭くゝゝゝゝ
不ゝ迫門ゝゝゝゝく潮勢も急ゝ波浪も逆
ゝゝく流ゝゝゝ幅狭ゝゝ不ゝ広き不のゝ場ゝ
しゝ多ゝども初ハ海と流しハ流ゝ里数経ゝく幅狭
ゝゝゝの広ゝも海ゝゝ不と云ゝ探ゝへしとゝひし
が赤間関の渡りを越ゝゝ潮勢の極なゝとおゝく
ゝゝゝより松ゝの渡ゝ場の急潮と考へ合せ信用ゝ

迫門ゝゝゝゝく廣渡りゝゝ浪逆ゝ幅狭ゝゝ不ゝ潮急
なゝゝと初ゝゝく唯海ゝ廣く流き不ゝ探ゝとて宗
るゝゝゝよりゝゝゝ理ハゝく云ゝゝゝなゝゝゝ実
境ゝ遠ゝゝハ云ゝ遠ゝゝゝゝゝのゝゝ

○七不思議

越後国弥彦の驛ゝゝ
糸ゝゝゝ不ゝゝ南ゝ入ゝ半ゝ里ゝゝゝ
ゝ如法ゝ村ゝゝゝ不ゝゝゝ
ゝゝゝ出ゝ家ゝ二軒ゝゝ百姓ゝゝゝゝ者の家ゝ

出る火うへうも大きうて大男方径の圓炉裏の如乃
角よりふるき挽臼と書き大きう甚挽臼の穴より篝火柄
径の竹と書き大絲より切りくさ迄きう甚竹の穴へ
竹の火とそのして解るべ竹の中うち火出て
右の炉の元よりする又強く吹消せば帰るなるうち
夏の大事の焼火のごとく長き竹の筒径三寸の横燭をとりせること
の筒径三寸ハ二三寸の横燭をとりせること
く光明玄法〜竹火ふるゆ名よりたきつ家まハむう
より油火ハ右周家内限〜七度のごとく挽臼に

名迄ふる竹筒続けハ火何方迄も引きて
ふへさきもで水のごとく名後方右へりうもてハ名火一
方のこまり命へ乱の濃もざるやうより竹と接ぎて導
けさたくまでも及ぶなり伝大なるべしやと疑ひく
懐中よりふろ〜印矩と名ふ〜件竹火ふるけ〜
岩の火のうへ印矩あ〜やけこげうう海京の日のの
径の稚より申けあつ〜印矩拾ふまう甚青ハいつのうう
ふうおうあ〜と弱るよ正保二年酉三月竹家まて
ハいごと吹〜てあう甚竹ふと地中うう生〜このう

今天明六年丙午の年より百四十二年の後一度焼
るゝ事なく出る事初て時は挑灯とふせしかば
とゝゝバかりや徳るにもあべきやと気もひとしき家
書清などある時とい〳〵ども此挑灯と称こすとぶ
といへど誠は数代の家の〳〵油火を用ること久く又
おしの物とハ糞或ハ焼ものを米ほうて大なる窪し
りぶべし又此如法なる村なり十里あまり東ハ上ガラメキ村
〳〵ふまた此ふ条ハ此法なる村なれ共数
又〳〵ふ此ふも出ること〳〵ふ条ハ此法なる村なれ共数
又〳〵ふ此其カラメキ村〳〵ハ行の近かく〳〵米
居出て

ものゝ〳〵ある所の小〳〵き火井と名付ること〳〵ふ日本の地
〳〵〳〵ゝ他国ハ〳〵き事なり

一奥水の油ハ芝田の城下より六里ばかり東ハ小ゆる志川とふ
村あり〳〵志川の東南西ハ一ばかりの蓼村とふあり〳〵和
ハ翻名川とふ小川あり〳〵川端ハ小しき居あり〳〵
枝林あり其所ハ小き池あり〳〵〳〵池ハ油湧く〳〵
其油の〳〵池ハ此ハ十弥あり〳〵ふ条ハ入口の不思議
〳〵成る池の大さ四尺五寸ばかり或ハ五六尺七八尺ばかり
〳〵ある所ハ大なるハ〳〵〳〵池の水ハ油〳〵出て

あと油ハ初くとうふ豆腐水中にある時豆腐ハ色飴色なる日に映しくハゝ色よこゝ光りて甚よ少至とけ面のハゞざるやうにくけあたりの里人名付池と領じ毎日油を汲あけ水の多くさるをカグヽとふ豆腐と汲く志ぶる時油と水とたやくこゝろこゝろとく濁沈を毎日油に斗とりつくるとふ公油灯火に用ゆる松脂の気あり臭〻故に臭水と名く灯火の光りハ黒烟うるゝ色と油の無るとき速よしく志ぶらも少し臭気あるハ横ハ常の油のまさりとも付ふるゝ毎日数斛の油出る少名付ふるゝ多く付油と用ゆる諸国地中より穿のとき出るしぶ〻しくとハ付辺の人ハ付ふるゝ田地山林おゝと拾く家財おゝくとるゝ付沈一つりてゝ人ゝ毎日五貫拾貫の沈と付ふる人ゝもあり入らぬ穿よ永久のよき事音し付ふる沈の売買甚〻しく辛も油よく濁沈一つ拾銭ふるゝ毎日の價ゝやゝ勇しに金五百両かゝるゝとふ故をカクヽとふ草ハいろる草ゝ問ふ事那ゝゝ

白草ふるいふるとの、あるとゆゆ甚神と夏の月よ多くれ
狩ゑくくなどよ用ひもとを

一孫融といふことあり先ハ越後の小中よりいづるとの下にも
ゆ長ゑるもの也老少男女の差別なく面部又ハ足ハと
太刀にて切りゑるごとくおのもとに切ることを紙の大小宮
ゆ或ハ四五或ハ撲ゑくゑるとゑるさもと骨の
切ゑゑゑゑ又指列血ゑゑといふもあゑゑ只宮
熱逆く発ゑ時疫傷寒のごとくゑゑ時甚だ伝染よ
く古ゑ醫と玉燒ゑゑゑ用ゑふ数日の月ふ年

念ゑ紙の辺もゑゑ紙ゑるゑゑふ代孫融ゑ生人ふ
事或ハ他方の地又ハかゑゑの辺ゑ甚だ大抵ハ宮ゑ
てあの法をどる伝ゑ法をどるとゑふ知ゑ代半越
後ゑ限ゑず奥州出羽佐渡ゑどゑもあゑゑゑハ北地
陰毒の瘴毒人よあゑるゑやゑゑふ又或人の説よる
孫融よハあゑゑ用ゑ方ゑふの代孫のもゑどゑゑゑ
方ゑと撲ゑく切ゑるごとくゑゑゑゑ生ゑゑ辟説ゑ
出ゑる只深き印屋ゑふくむゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑ度大和本草ゑゑゑゑ代漢ゑゑゑゑ

出セりさるまの山や

一波の題目とりふさ寺泊りの海中上あるむさし日蓮

上人佐渡へ配流の時海上小雪のひしり妙法蓮華経の

文字入りよ狩りくく法華信仏の人船上にうく其所

よりのぞき波の上に題目あらはれたりと

一逆板竹いむしり親鸞上人佐国へ船流の時携へ給ひし

杖とさゝ寺に地よさし我流布の法世に弘ゆく杖

の竹あひ生ひ出へしといひ伝へしよ其杖さゝ寺

らに枝葉ちぎり其後ちぎり根よ生ずる布の竹是逆板の

しるしと人々ハ其古跡のみ鳥屋野とゝふ所なり

一八ツ房の梅い文田とゝふ所ありて一つの基よ花実八ツ房

のる事無数のものゝ中にもとき沢八房論梅と

て、よりゝ方ハ多くあり梅ぬ是等とあハせて七不思議

いと仏ゆるゝ事ぬ一ゝ度寺のる乗あり又

繋ぎ樋ゝて新潟るゝ人家よりはるぎ掛ひし樋の実

と仏ゝ比人々よりあるかの実る糸の遠りる定め

ゝいふ又七ツ坂と八ツ瀧ゝて八ツ瀧の又ハ八瀧のごとく

ゝゝセツ所ゝゝ坂ゝの坂ゝ坂ゝの坂ゝ坂ゝある山あるなど云其山ゝ向

一ハさくふ幻庵大極方信のひ使すて番給ふ
辨しごし
一弘智法印の遺跡玉章物かたり信方へ持出へく開
帳ともかゝ又東奥記仍まつらしくそるやと戴く
暁ゝ印板よ行るとハ入ることゝ思ふ

東遊記巻之五終

東遊記巻之五末

平泉

奥州平泉ハむかし奥羽二州の大守鎮守府将軍秀衡
父祖三代居住の古城跡なり僧侶の住ものゝ行
二十四里餘北の方ゝ前よ北上川長川と更け
うゝ紙い高山幾重もかさなりて寒に要害の地之
秀衡清衡ハ建立せる中尊寺入ゝ存在しく
昔の俤ものあるゝよ人くあり見て什山我関山と
いふ禁乃街道よ昔関所ありく長ゝ関とゝ等く

けれよ世山を関山とつゝく中そるの山ゝをもつゝ山と
遂ゝ里成今ゝ七上長下長とゝく成家あゝ長
以里に流ゝ川也長ゝ長川ゝ名なけ長の里ゝ
関所也長の宿ゝもいふなゝ安永頃ゝ
ゝ長川の橋ゝ中尊寺ゝ一二里ゝ
りゝ山ゝ入りくあゝ又義経の住ゝ高館ゝ
ゝ関山ゝ下ゝ繰ゝ街道ゝ筋ゝ
ゝ中ゝ
ゝ中ゝ高ゝの城郭ゝ

只時付義経の住ゝ屋敷の跡ゝ也ゝ今ゝ草木ゝ
茂ゝ芭蕉ゝ名ゝ句ゝ碑あゝ遠野ゝ高ゝ塚ゝ
木ゝ高ゝ塚ゝ名ゝ古松一本ゝあゝ明月也弁慶
ゝ古跡ゝあゝ又中尊寺ゝ白山宮ゝ
ゝ西へ行けゝ物見ゝ高ゝの古跡ゝ
ゝ向ふゝ山成陳場張山ゝ二ゝ地名
ゝ義家ゝ住家ゝ退伐ゝ陳ゝ
ゝ義ゝ
ゝ長者ゝ
ゝ金賣ゝ

続きて又東北の方よりくだるハ吉野の
山なり　せばきうち　稲山　櫻　吉野の和にかくべくハ
こよなきる山もなし　櫻多うしてハ人々そこにこのべく
いあり　法金剛院　長春陸奥　うそ出ハ
稲山　櫻多き山　うつ　花の法　必見
下　とて　和かどおくもあれハ奥州地ハ入
ゆくうち　日　見　やうく　ゆくあ
とも　くて　ハ　一ハ　者　見
例の　ハ　中　法

法堂　弘台寺院　東
叡山の東寺　慈覚大師　後年
く　府将軍　清衡中興　清衡
の初文　此時　奥羽二州の
御堂　中興　堂塔
宇禅房　建立　其結構
玉　全盛　堀川院
院等の叡山　遠ク　大法　丙午　按察使
中納言顕隆　勅使　御

文の草稿ハ右京大夫教光朝臣清書ハ冷泉中納
言朝隆卿なり今に寺の什物として所蔵せり右大
将頼朝の御教書又北條相摸守貞時小田中納言
顕家浅野弾正少弼長政豊臣関白秀次公等の
文書数通ありしがいづれも当寺に蔵す扨右
の堂塔伽藍建武四年回禄して経の経蔵一宇
金色堂一宇を残せり是も星霜久しく移りて破
壊におよびしが百八十余年の後に至り正徳元年
鎌倉将軍惟康親王勅をうけて北條貞時に命じ

此二つの堂に又別に新に覆ひ堂を造り風雨を避
け修営を加へしかども其後今に至り時々回至まで
代々覆ひ堂を修理して風雨を防ぐ此ゆゑに円満
なりて清衡が建る所金色堂并に経蔵能く残りて
其むかしの俤のこり亀牛今も宝物の妙なる麗し
く日光山なが世間是に比すべきものなしとぞ云ふ布
ぎせみし厚く漆ぬりて其上に金箔を押て堂中
一紙の金色なり長押の地紋まで螺鈿珠玉を以てちりばめ
中檀四隅の柱まで七宝を以て荘厳せり既に五六百年

と伸くあるべき様細も見落さず洗ひも欲換じ金箔
も剥ぎ捨て又新法摸千軍万馬今ふ物あり
とかやうに申し伝へし中堂の上ゝ阿弥陀観音勢至ホ
の仏像と共に壇中に壇中に入の指と紙に中ハ清
衡尤ハ基衡右ハ秀衡左ハ秀衡の指の側より和泉
三郎忠衡の首桶に紙を入れ酒を注
衡ハ大治元年丙辰七月十七日逝去基衡保
元二年丁巳二月十九日逝去秀衡文治三年丁
未十二月廿八日逝去すし云仏堂の内の什宝数々

多々中に清衡の御手ずから紺紙に金泥銀泥にて
樒書行書まぜ書の一切経あり是を清衡存生の時自
在坊蓮光といふ僧に命じ一切経書写の事
むこうの間経書の傍数百人を招請して供養
をとゞめ給へ金も代経と和見ずして其まゝ体
樒法正しく行法示指ゆうゝ漢土法論名ゞ
らく書せしむるも中くに偽こ無ゝ沢と見
彼時ゆゑ日本もかゞうの能書多くの世に誰一
人ゆゑ無きハ誠に歎息とするも為ん方なし

四海義軍の事は穂ちるいとなく文華地に隆さ
る所なるべし其人は不詳多くは一切
經九部五千卷八一二卷にも世間に
出しまき事なるべし經の第八黒漆に螺鈿の
數珠を載せ赤古研を以て公卿も基
衡初めし紺紙金泥の摺書の一切經あの見た世
間書通の經のごとく又秀衡の如くして宋板の新
刻の一切經なり公卿は玉軸の法華經を以て邪小理通
風の筆跡なり是八条入道とは法名なり

き又天台大師の影像一幅地ハ竹布とふるのして
画き唐人ゆく甚名ハ知ず讃ハ顔魯公の筆とい
ふなれも當寺寺一の寶物とし〻て〻を祥ず
惡ゑん大師唐土より將ゐ来の物ちり〻ゑ外金剛の
画乃十二神牧溪の觀音ふ将く寶物多〻基衡
も亦最佛法ゑ帰依し毛越寺多隆寺嘉祥寺
あ伐造ゑ佛工運慶と〻く丈六の薬師如来及
び十二神將其他仏像若干と造〻めと〻て
づ運慶ゑ仕者と賜りあす甚品

一金百両　一鷲羽　百尾
一七間間中經り之水鞠皮　六十枚
一安達絹　千匹　一希婦細布　貳千端
一糠部駿馬　五十疋　一白布　三千端
一信夫文字摺　千端

右ハ奥羽の產物陸奥ゑ陸(運慶ニ
送る運ゑ是と將く丈ゑ收ひ又奥州ハ俗ゑ称
ゑ仕者ゆく仕由とい〻ひ〻ハ基衡又俗ゑ伐
ゑ殺ハ取ゑ積て〻ゑ運慶ゑ送る運ゑ收ひ〻

かゝる仏像をはじめ玉眼を入るゝ事三年の昔に初る
語り奥州より起ると云佛像に玉眼を入るゝ事附より
今も残れるごとく是等のことにても當時平泉の繁栄
なりし事推しはかるべし秀衡ぬしの頼朝をだにあなどり
つゝ居られしもむべなり

是のみにておもふに今の世泰平の久しきにもあらば
ことさらにかゝる金銀も世の中にたくさんに成りぬべし
此平泉の盛なりしころの人右の様におもふに今は纔百年を
見ざりしかのあのおかしさはかり合はず又僕が友坊南郭

大佛殿建立の時も鎌倉よりの寄附後に金五千両
を寄進有り今の世にては常法町人の分限にても千金万
金の寄附をするもの多くありけれども今の世の金銀
も沢山にありてよみつゞかふにおどろく時は昔より多きこ
とゝいふべし。

三尊窟

伊豆国は駿河相模の二国より南の方箱根より
南の方二十五里出張りしたる国なり故にいつもの祠
まはりはみな海にしてぞ志摩の国まつの湊にいたる

の中間の湊まで七十五里の海と遠州灘と称し
日本第一の大洋なり此下田より西の方に当る石浦と云
所の宮より奇矣の巌窟あり山の辰巳より命じて落
出る出潮よりあるて岩屋の口狭く出潮高きは八
尋と入るべし此巌窟より北の者潮しぶきて
巌窟のあるに出る時と考ふるに変ず海面
五月の初より北北より北東に吹く海荒ら
しく八月天気とろんを潮と考て十五日より遠面
十月まで海の中より北東に吹小潮なれば又入

ばかりなれば朝夕の大潮と云故なり其日は
穏なれば風きまりなく海と波ちく乗のとろかくなり
しかれども波北より合せし諸国の猟家六人船
に二人と合せて八人乗のり終日小き猟船に
棹しく海上十丁ばかり出て鱸のうを
る乗に完の内狭りなれば巌窟より遠しまに窟中へ入
づさ時なるべきよりなるべきなり出潮
に成あらざれば入る程に完の
色黒きやうなる人

右の方よりめぐり廻るとバ日の光も西に傾くごとく
宛の山桜ハ花ども南海と交まじくバ波はよるく宛
の間の岩石よりあり磯くみ玉散り西に流るゝ
勢よとくぐ舟に付て行きけだるくもふ法よ
を命ふの色岩をくしくとあ成ゆりとゆりすんさ
いくらし浪乃まゐハ宛乃間よりぎきくおびさいしくて
の岩ろしきハいとうくちくし同伴の者ども各と面
するだろうし紙よりあふの巌塔さう光
くしくとる程ふさしもよくくるし宛の間勾白色

のごくゆくゆふ所くとる霧ゆちる水まぢはは金
色とある和平一同よ驚ゆ見あつとい岩よ又勾ち
真の間くかんくとる鈴ふしく人と見いて忙然くる而
よ又ハ岩くくしく金色の光輝るゆ前のごく
此時仏祖留色くとるに命ふ扉風と立くるぬき
乃面よ之るの弥陀ありくくと坐ぢゆふ中ゆの御長さ
ハ尺よ方よくりとゆ侵光乃部くしくとハ所ふ宗
ゆふ儀ゆり前よ並びゆふ部無音と縁こもるゆ像
ハ一尺二寸平又ゆしゆるとくゆ物三王ゆ吉薩と又元

ぬふハ七八寸にあまる是世に云十六善神の如る体現ぜん
を遊よそ目にハさせ給ふ様に見事なるありがたく
こゝ所ニ銀どを不思議さ等是香端の如ふ而ーの
あり是舟御堂の舟を出まふ帰る事ハ彼今一夜ねま
人とうしほに向ひて吾とろし釈迦の内に又初
めのやくなりしとも是る不おもしも遠ハざりし初
穴かなりニかゝるに天日いよゞ正午をあり是後
同行の者ニ問ニ皆ふこる体相ハ同じけれども或ハ佛の
御と夜を以尺人とそえるまあり或ハ二尺三尺だうりなと色ゝ

ニ云又光明の赫くたるにある事にも驚かさるゝ者も
佛体をまろと見定まらしもあるべし扨又懐の所
まろとなるハいろふる出来ども此りふに佛のつまれ岩に
浪打寄せて仏を霊顕へハ陽に浪をなく退きたて岩
根まで出れバ佛のいまれ岩あるのるゝ出来仏体見えて
穴の内明らかなる夕日出来三月節句は大潮干の比
を佛をゐるく拝み岩根なくあらハれ仏体に潮打寄せ
露らはなりしバ佛体岩ふあらはれ穴の内明らかなりの
とおく干潟に入る者仏躰いまれ岩根に拝よらく叢

と探りえてもなほさらる仏体もなく又それと見る
べき形もなし其岩根とおぼしき退けハ仏体現ずるふねき
きさ世のふるぐいつの法よりかゝる事実の霊験ありと向
ふよ昔ハ什宛の中悪ろしとて入る者なかりしら七八十
年以ゐ誉ちる者ふしと蛇さどいなどと探りて入りしふ
人探りぬ宛のうちあれハ驚愕ハ物あるしよ恨く奥深く
入りくはしふ什仏体と見出せしふ迷昔ハ是の霊風
信じて人の公おそろしうしうしが什霊験を拝をし
ら仏法とそうぐこれ自然ハ人の公案

和こるうをそをき温厚ハ風信となりをうとをく昔の
物語ハ文中ハ正月を紀ハ為る者生ろ唱へくイ十世ふ
らふとこあるこで言せくゆをを古所で後ひま
ぜふと生と年紀の往言と伝生といろなるうけと思ふ
ホイ十世ふ什海とこの要風ろう什風次時を什遠の者
ともをんをハ松明と持ち或ハ脇ハ戸と頂ふい火武
燃しく演道と仕為ふ中ハ行ふふ転稔風ふ喜
ふふ入るべき湊やあるふ移ふ人あるる時什火の光ろ
とをんぐく人家やある形やあるとハ他為ハ海風の岩

よ舩碎けく破れよ乃ぶ里釣漁くよう舩を出し
彼破れたる荷物道々とろう拾むさ化ばうを今に
ありても什造の古き家ハ天井板義なども多くい舩の
古板うて作るよう加う悪風信のなりむ仏法の恵を
よう〳〵楽和乃ム之変じるハ偏ょ古年の浦化山
の奥海のえ〳〵まぐも乃びくよき数のりまうる
山名よう乃年余ろ明皮堆面とうる人余よ少先
逢ちく瀧潜の絶り山ろの拝観の為ょ天下と漫拝
せ〳〵日まれあうう乃夜乃ひて海うての浸茂埃隨市よ

ふきかをはくろ諸国の茅葺城郭〜条も示し長
たくく知られしが甚人をきたれ沢山にて
都り交めぐく所為も学ぶ知るくもあるまぐくなるゆ
うんるもをくくく久しきの中にて一二年と出くらるる
ものし国より余るうし年土坂義屋町の人拾皮屋作を法
といふ者より学ぶ人弘法大師の四位を学ぶ四国巡拝
せく時小阿波国より伝ふ知るあるより新四の滝と
いふ滝あり知己刻だうと新四の時刻くして法甚滝
より無法なるるすかるる甚地源山の谷合なるが新四の時の

法新日東方ようやく滝の水より輝き映とし白い滝のまい
中より光明赫やくくく金色の不動尊現ぐ出る
時うくく又すの滝だうくなるうの仏を落も示法
て新くく拝ふもまうくて孫有津ありきと強まう
いつも甚時刻八己刻法より滝まう信仏源兵人い毎こ仏を
き人八拝むるすかくくく云見い天気の晴暑ようるべき
すや顕るれうくくる津ありう

不食病

三河国巨海村天猟山長寿寺より中を甚者八魏く無

る大伽藍なり頼朝の息女足利義氏
を聟しく家氏の室となるなり此ゆゑに義氏三州より封
せられ西尾の城主となり吉良氏の姻戚となる此室後
後堂宇伽藍を一寺領をも寄附せられ則此長
寿なり御堂に葬る氏義敗亡の後も後堂繁
しく名のみ残りて一宇の小堂ふ姫歳をとり
と安置一人乃尼僧あり常に寺務をとり
此尼上位なる尼二十年斗食のひとふりて寺務乃
人なりとあり評判して信仰の人群集条

女御面をとり迷漫花のおもてにつぐくこと花ふ
ふ赤裸しく生者体とえる顔色ハふしまざあなまで
色身の因ハ中人よりもかつ聊さるとく毒ハふし
ども御面怪しく平あくうふ旅石しくもの
成世くよ二十年斗の断食虚弱ハあれば此尼十ハよ
身の法より少食ふしてナ古色年まして因村よ嫁しかれ
ども御身かりしてふ嫁しかりくと返ハ尼ふるうて
此尼上位り返ハ返ハふ食ふ一月よ二三度ハ
少し食とれいとひとり返ハ返ハふ五食しして贅

のみにて少しも食することなくして茶を服するのみ
食せざる也。されば常の食物も飲まず、只一ツ湯を呑事も
このごとく飲食なけれども身体堅剛にはかりて事も
なし。此の女年も信州善光寺に参詣せし数十日の旅
行に一飯も食せずして歩行も達者にして来れり
道路せし所にも強くはなし。飲食の絶たる
事あるはいかにも自然にかくのごとくなるは、人皆不思議
に思ひ、信仰して参詣する者多く、怪異なる事を恐れて人
民を迷はす人なりやとて官よりも疑ひかかりて吟味のため

もありしかど、唯病気ゆゑのことなれば、御沙汰なしとて
其のまゝにありし。婦女のあやしき事に記するのみの病
昔の医書にも見えずとも、年を経ても世間に
多くある病なり。香川子も此の病を論じて彼の家にては新
まず不食病と名付られる。余も数人を療治せしが、志ある
事に療治する、念じ婦人に多く、男子には一
婦人とそえたる婦人に嫁し、出産などもする
ありしは、正一年に此のごとく不食して、数年の後には
不食する男子にても婦人にても此の病の中に何程の病

の傷を時後利後悔るのよりきを発生するも叶ふる後の方福
と煩くしかく至急用うの射うに必ずく食をるものもろう
福後一幸もるく気力光のごとくうまもとに又潮こに
不食ふ為るものふう付を福とて矢に米穀と忘嚊ひか
き餅或い豆腐或い蕎麦等はどきものだろうと也
つ入食ふ或い酒ふどろうと春抜く潮こうはを食せ
さるもよ為るものを怪くむよ呈ば又一生涯食を
よくしかだく義せざる人もあり矢の寿福嚊祈天下
の国内に稀くの事あるく空も見なび吟乃ふ見い我

本業のようにて我一よ如と用るしうるふしい別の弱ひ
のようにうしまだんの祝寿のことの成出集
一ニ医話ふるみなて教意しふせう然るハ頃面物何く
ふく基書集しも出る載ふしばあるくふ去るせふく他き
どもかる寿怪のくもさくハ春氏の人と逢りしく
金銀とむさぶるとあり十ふ八九ハ位ぐうふそなな
ア多ふうもいつの御早ようや一人の優婆塞影食しく
他ー通被御ふしー寿矣の美験ありし佐系ふふう奏
聞仕帝寿特よ足る主則召上せく神泉苑ふ位せ

む法華経の男女貴賤辯集りく信仰を尊ぶ数日
の後は諸國よりも遠く来る所聖人の教
感験せざるこなし効驗天下に聞えて上は王公より
下は庶民に至るまで其信せざるこなし或
人夜ねて夢に彼の人来て教法を授る
あるいは欲むく法華経を人身に刷とるもひとり
小来嘉山のもとに堪へたる枕てもしく平坦
信仰も失せあるに人も堪へざるまぎれく伝方
もなく遠き去るも婦女の教

来嘉の人とて称しく人もきたの青年
馬徒も毋くハ計来嘉の人の教のもとく

東遊記巻之五終

西遊記　二編　出來
東遊記　二編　出來
同　いろく孫娶事新集　三編　近彫
寛政七年　卯八月

書林

京都寺町通松原下ル　勝村治右衛門
大阪心齋橋通安土町　吉田善藏